

主 題：王として生まれた方にひれ伏して
聖書箇所：マタイの福音書 2章1-12節

テーマ：王として生まれた方／イエス・キリストの誕生にふさわしい応答とは何か？

クリスマスおめでとうございます。愛する皆さんと救い主イエス・キリストの誕生を一緒にお祝いができるこの礼拝の時を本当に感謝しています。

今朝もこれからみことばを通して、私たちひとりひとりにとって大切な真理を考えてみたいと思いますが、まずはきょうの聖書箇所となるマタイの福音書2章を開いてみてください。きょうは特に2：1-12の内容を見ていきたいと思います。この箇所は、ユダヤのベツレヘムにイエス様がお生まれになった時、東方の博士たちがやって来て黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげたという、多くの皆さんにとってなじみ深いクリスマスのストーリーの一つだと思います。余りに何度も耳にし過ぎたことで、私たちは普段この箇所をさらっと読み流しているかもしれません。でも、きょうはいま一度、この箇所からイエス・キリストの誕生のすばらしさを思いめぐらせてみたいと思います。

○王として生まれた方に対する三つの応答：

そして、そのことを思いめぐらせながら、ぜひ次のことを自分自身に問いかけてみてください。王として生まれた方、イエス・キリストに対して今自分はどのように向き合っているだろうか、この方に対してふさわしい応答をしているのだろうか。というのも、これから私たちが見ていこうとしているこの有名なストーリーの中には三つの異なる登場人物の、三つの異なる応答を見て取ることができます。三つの登場人物というのは言うまでもありません。ヘロデ王と祭司長や学者と呼ばれる宗教家たち、そして東方の博士たちです。そして興味深いのは、彼らは同じ時に、同じキリストの誕生というすばらしい出来事を知り、聞いていたにもかかわらず、全く異なる応答をしていました。そしてそこから私たちはあることを見て取ることができます。彼らの応答というのは、それぞれの心のうちにあるものを明らかにしていました。ではいったいどんな応答を彼らがしていたのか、異なる三つの応答をそれぞれ順に考えてみましょう。そして、その応答を見ていく中で、ぜひ自分と比べてみてください。果たして私は今、イエス・キリストに対して、王として生まれた方に対してどんな応答をしているのだろうか。そのことを念頭に置いて一緒にみことばを見たいと思います。

マタイ2：1-12

「1 イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。：2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」：3 それを聞いて、ヘロデ王は恐れ感った。エルサレム中の人も王と同様であった。：4 そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。：5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。：6 『ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから。』」：7 そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、彼らから星の出現の時間を突き止めた。：8 そして、こう言って彼らをベツレヘムに送った。「行って幼子のことを詳しく調べ、わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから。」：9 彼らは王の言ったことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。：10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。：11 そしてその家に入って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝

んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。:12 それから、夢でヘロデのところへ戻るなという戒めを受けたので、別の道から自分の国へ帰って行った。」

1. ヘロデ王の応答：恐れ 1-4、7-8節

早速、一つ目に見られる応答から一緒に考えてみましょう。このストーリーの中から、私たちが見て取ることができる一つ目の応答は“恐れ”でした。王として生まれた方に対して、恐れ感った人物がいたのです。その名はヘロデでした。このヘロデとはいったいどんな人物だったのでしょうか？この人物は、ユダヤの王様として君臨していた人物でした。後にヘロデ大王とも呼ばれる彼は、確かに賢くて有能な戦士でもありました。また、多くの建築物を完成させたりとすぐれた部分もたくさんありました。でも同時に、非常に冷酷で残酷な人物として知られた彼は、自分の王座を守るためであれば何でもしました。自分の地位や権力に対して信じられないほど嫉妬深かったヘロデは、常に周りの人たちに対して疑念や恐れを抱いていました。そしてそれゆえに、こんなことがありました。ある時、自分の義理の兄弟アリストブロスが王座をねらっていると疑念を抱いたヘロデは、義理の兄弟を処刑しました。また、彼は自分の妻さえも信用することができずに殺害し、その後には彼女の母親を、そして自分の3人の息子までも処刑したのです。これだけでも彼がどんなに残酷で、ひどい人物だったのかがよくわかります。でも、もう一つつけ加えるとすれば、ヘロデは自分の死を目の前にした時に、エルサレムに住んでいた著名な市民たちをつかまえて牢屋に放り込みました。いったい何のためだったと思います？それは自分の死を悼んでくれる者が町にはいないことを知っていた彼は、自分が死んだその瞬間、捕らえていたそれらの囚人たちを処刑するようにと命じていました。そうすると、エルサレムの町全体が否応なしに喪に服するようになるからでした。やばい人物ですよ。でも、これが当時、ユダヤの王様として君臨していたヘロデ王だったのです。

そしてそんなヘロデ王のもとに博士たちがやって来ました。もう一度1節を見ると、こんなふうに記されていました。1-2節に「:1 イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。:2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」」と書いていました。博士たちがとんでもない質問をとんでもない人物にしたことは、とりあえず置いておいて、少し想像してみてください。博士たちのこのことばを聞いたヘロデは、真っ先に何を思ったと思います？しかも、彼らはここで「ユダヤ人の王にこれからなるお方はどこにいますか」とも、「ユダヤ人の王にふさわしい方はどこにいますか」とも口にはしていませんでした。彼らは「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいで」ですかと聞いたのです。何という質問をするのだと思うかもしれませんが、当然、ヘロデはこのことばを快くは全く思わなかったでしょう。確実に自分の王座が脅かされていると感じたでしょう。「ユダヤの王は私ひとりだ」、いったい全体このユダヤ人の王として生まれたなどと言われているこの存在は何者なのだろうと思ったはずです。またこのヘロデは、ユダヤ人の王として生まれると言われている存在が、普通の王様ではないということにも気づいていました。それは4節を見てみると、彼自身がその者のことをこんなふうに言い表していました。「そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。」と書いています。「キリスト」というのは、神様が特別に選んだ油注がれた者のこと、人々が待ち望んでいたメシヤ、救い主のことを表していました。要するにユダヤ人の王として生まれたと言われる方は、神様が特別に選んだ救い主、まさに王の王として君臨されるキリストだということをヘロデは知っていました。間違いなくこんな者の登場に、ヘロデは何も思わなかったはずはありませんでした。

だからこそ彼は応答したのです。少し戻って3節を見ると、「それを聞いて、ヘロデ王は恐れ感った。」と書いてありました。ここで使われていた「恐れ感」うということばには、「気が動転する」という意味があります。もっと言えば「恐れおびえる」という意味も含まれています。つまり博士のことばを聞いたヘ

ロデは、ここでただ驚いたのではありませんでした。少しだけ混乱したのでもありませんでした。そのことばに気が動転して非常な恐れを抱いたのだと言うのです。ある聖書注解者もこのヘロデの様子をこんなふうに描いていました。「対抗するユダヤ人の王がいるという考えだけでも、彼が恐怖に陥るのには十分な情報だったことでしょう。震え上がっている彼の姿が目には浮かぶようです。」と。文字どおり自分の王位、王座を守るためであれば何でもした人物が、自分自身の地位や権力に対して信じられないほどの嫉妬深さを持っていた人物が震え上がっていたと言うのです。この人物が全く喜んでいなかったら、当然こういうふうになりますよね。3節の続きに「エルサレム中の人も王と同様であった。」と書いてありました。エルサレム中の人たちも恐れおびえていました。なぜなら彼らはだれよりも自分たちの王がどんな存在なのかということを知っていたのです。自分たちの王が自分の王座を守るためであれば、自分の妻や息子、家族さえ容赦なく処刑するというのを彼らはよく知っていました。そんな王が恐れや嫉妬、怒りに震え上がっていたとすれば、いったいこれからどうなってしまうのかと彼らは確実に思ったでしょう。ですから、エルサレムの町も恐れていました。

そして恐れ感ったヘロデが次に取った行動が続きに描かれていました。7-8節に「:7 そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、彼らから星の出現の時間を突き止めた。:8 そして、こう言って彼らをベツレヘムに送った。「行って幼子のことを詳しく調べ、わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから。」とあります。私も行ってひどい目に遭わせるからとは言っていないでも、「行って拝むから」と口にしていました。どう思います？ヘロデは心を入れかえたのでしょうか？最初は戸惑いを覚えてしまったけれども、やっぱりユダヤ人の王として生まれたその方を自分も喜ばないではいられないと思ったのでしょうか？多分ここにいるだれも彼のことにだまされないでしょう。そんなことなんて1ミリたりとも思っていないでもした。それが証拠に、ヘロデは博士たちのことを密かに呼んで、この時、星の出現の時間を突き止めていたのです。何のためにそれをしたと思います？その答えを16節に見て取ることができました。16節に「その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。」と記されていました。ヘロデ王の心は恐れや嫉妬に満ちていました。そしてそんな恐れや嫉妬は怒りへと変わり、彼の怒りはひどい殺意へとつながったのです。彼は自分自身が持っている地位や権力をだれにも奪われたくないと思っていました。王である自分自身の立場を揺るがすようなものなどいっさい認めようとしていませんでした。ヘロデは王としての立場を失うことを頑なに拒んだのです。だからこそ王として生まれた方を恐れた、それが彼の応答でした。

さて、ここで少し考えてみてください。果たしてこのヘロデのような応答を今している人はいないでしょうか？王として生まれたイエス・キリストを王として認めることをせず、それを拒んで、恐れを抱いている人はいないでしょうか？もちろんこれを聞けば、私はヘロデのようにキリストに対して別に嫉妬や怒りを抱いていないし、恐れも持っていないと考える人もいるかもしれませんが、でも、ここでのポイントは、今嫉妬や怒りを持っているかということよりも、問われているのは、あなた自身が王として生まれたイエス・キリストを自分の王として心から認めているかどうかということです。ヘロデはそれをしたくはありませんでした。キリストを王とするということは、自分自身はもう王ではないと、自分はこの王のしもべであると認めることです。そしてしもべであると認めるのであれば、自分が今、何をしたいのか、何が自分の喜びなのかではなく、キリストが何を自分にしてほしいのか、キリストが自分にとって喜びなのかを、いつも追い求めて生きていくということです。果たして自分のすべての面において、キリストが自分の王であると受け入れているのでしょうか？それともヘロデのように頑なになって、自分がこれをやります、自分がこれを計画します、自分がこれを支配します、そういうふうになら自分が王としてふるまっているのでしょうか？ヘロデが頑なに自分の

王座を明け渡すことを拒んだように、私たちはほかの何かによって支配されて、キリストに王座を明け渡すことを拒んではいないでしょうか？恐れというもの、それが最初の応答でした。

2. 宗教家たちの応答：無関心 4－6節

次に、このクリスマスストーリーの中に見られる応答は“無関心”です。王として生まれた方に対して、全く関心を示そうとしなかった人物たちがいたのです。それが祭司長や学者といった宗教家たちでした。祭司長や学者とはいったいどんな人が簡潔に言うのであれば、彼らは当時の社会において大きな権力を握っていた宗教の指導者たちでした。祭司長というのは宗教だけではなく、政治の場面においても力を持っていたり、また学者と呼ばれる存在は、律法の専門家として人々を教えていたりしました。彼らは旧約聖書にも精通して、ほかに並ぶ者がいないほど多くの知識を持っていました。だからこそ、王として生まれた方がどこにいますかと質問されたヘロデが真っ先に頼ったのは、彼らでした。4節に戻ると、王様と宗教家たちのやりとりを見て取ることができます。4－6節に「:4 そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのかと問いました。:5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。:6 『ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから。』」と書いていました。さすがでした。宗教家たちは、王様が必要としていたその答えを知っていたのです。だからそう聞かれた時、彼らは何の躊躇もなく、「王様、その答えなら私たちは知っています。」と返事していたのです。かつて預言者ミカを通して、神様が約束されていました。王となるその支配者は、ユダヤのベツレヘムから出ることになる。長い間、イスラエルが待ちわび続けてきたその救い主キリストが小さな小さなベツレヘムの町から出ると、彼らは言ったのです。ちなみに、このベツレヘムという町は、レジメの地図にも載せましたけれども、彼らがいるエルサレムから南に8～9キロぐらい下ったところがありました。頑張って歩いて行こうと思えば、幾らでも歩いて行ける距離でした。

でも、残念ながら、宗教家たちはまるでこのことに興味がなかったのです。彼らは確かに正しい答えを持っていました。イスラエルがずっと待ち続けてきた、旧約聖書を通して絶えず描かれてきた救い主が生まれたと言われているにもかかわらず、彼らはそのことを自分の目で確かめようとしませんでした。彼らはそのことを知っていたのです。でもそうはしませんでした。博士たちのところに行って、その子どもの特徴を知っているのだったら教えてくださいと尋ねることもしませんでした。ベツレヘムの町はほんのすぐそこなのに一緒について行っていいですかと、王として生まれた方のところに行こうともしなければ、その王のことを礼拝しようとしませんでした。彼らは、ほかの人が知らないことも教えることのできるほど、たくさんの知識を持っていました。そんな権威ある立場にいる存在でした。でも、彼らはそのすべてを自分のこととして関心を払うことがなかったということです。もっと言うのであれば、彼らは知っていることに素直に従うのではなく、耳を傾けるのではなく、ただ知っているということに満足して、そのことを誇っていました。彼らの心には何よりも自分たちが持っている知識を自分たちの持っている地位を、力を愛する思いがあったのです。だからこそ宗教家たちは、王として生まれた方を知っていたにもかかわらず無関心でした。それが彼らの応答だったのです。

さて、ここでも少し考えてみてください。果たして、この宗教家たちのような応答を今している人はいないでしょうか？王として生まれたイエス・キリストが、救い主として生まれたイエス・キリストがいることを知っていながら、無関心を貫いている人はいないでしょうか？もしかしたら、これまでに何度もイエス様の話を聞いてきて、数多くのことを知識として持っている人はいられるかもしれません。イエス・キリストは救い主として来られたお方なのでしょう？この方にあるのみ罪の赦しや永遠のいのちが与えられるのでしょうか？それも昔聞きました、それも私はわかっていますと。でもどうでしょう？たとえそんなに正しい知識を持っていたとしても、キリストに対して今、自分はこの方とは関係ないとふるまってはいいのでしょうか？ただ知っているということに満足して、本当に必要なものが示されているにも

かわらず、それ以外のものが私にとって大切なのですと、目を背けてはいないでしょうか？何よりも悲しいのは、宗教家は何も知らなかったわけではないということです。彼らはイエス・キリストがいったいだれなのかということも知っていましたし、どこで生まれるのかということも知っていました。そのすべてをわかっていたのです。でも、彼らはその知識が教えてくれることをみずから拒んでいたのです。そして今の私たちも同じです。ここにいる私たちひとりひとりも、キリストについて多くのことを知ることはできます。キリストについて多くのことを聞くこともできます。でも、宗教家たちはこの方を信じ、従わないのであれば、この方を心から愛していないのであれば、それは何も知らないのと同じだということを知らなかったのです。果たして私たちは今、宗教家のような無関心な応答をしていないでしょうか？

3. 博士たちの応答：礼拝 9-11節

そして最後三つ目に、私たちがこのクリスマスのストーリーから見られる応答は、“礼拝”です。王として生まれた方に対して、ひれ伏して心からの礼拝を捧げた人物たちがいたのです。それが東方からやって来た「博士たち」でした。この「博士たち」というのがいったいどんな存在だったのかについてはいろいろな考えや意見があります。そしてそのすべてを今見ることはできません。でも少なくとも言えるのは、彼らは知恵に富んだ賢い人物たちだったということです。というのも、今「博士たち」と訳されていることばには、もともと「賢い」とか「学識がある」といった意味が含まれています。そして、そこから、高度な教養を受けている賢い人物のことを表します。あるギリシャ語の辞典を見ると、このことばは次のように説明されています。「(博士とは) 賢者であり、祭司であり、占星学や夢の解釈、その他様々な秘術の専門家であった。」と。ですから、ここで登場していた「博士」というのは、まさに数多くの知識に富んだ存在でした。また、特に天体とか星を読み解く専門家だったのです。彼らは星を見て、方角や目的地を考えることができたり、さまざまな星の意味を読み取ることもすぐれていました。そして、そんな彼らが東の方で特別な星を見、王の誕生を表すしるしを目にして、エルサレムへとやって来たのです。そしてエルサレムでヘロデ王から誕生の地を伝えられた後、彼らはベツレヘムへと向かって行くのです。

●博士たちの態度

その時の様子が9-11節のところに記されていました。ここを見ると「:9 彼らは王の言ったことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。:10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。:11 そしてその家に入って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。」と書いています。博士たちは、ヘロデ王や宗教家たちとは全く違っていたことを、はっきりと見て取れます。彼らは王として生まれたその方に会いたいと、その熱心な願いを最初から持ち続けて旅を続け、遂にその方のもとへとたどり着くのです。そして、そんな博士たちの態度のうちに、注目したい三つの点があります。

1) 「この上もなく喜んだ」 10節

まず、注目してほしいのは、博士たちは喜びにあふれていたということです。10節を見ると、「その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ」と書いていました。「彼らはこの上もなく喜ん」でいたのです。ただ、この部分を原文そのままにして直訳してみると、実はこんなふうに訳すこともできます。「彼らは大きな喜びで、この上もなく喜んだ。」と。彼らがどんなに喜んでいただのが想像できます。彼らはただ喜んでいただけではありませんでした。彼らはただこの上もなく喜んでいただけでもありませんでした。王として生まれた方がいる場所へたどり着いた彼らは、大きな喜びでこの上もなく喜んでいただけだと言うわけです。言い換えれば、博士たちはもう言い表すことのできないような、そんな喜びにあふれて、うれしさや幸いでいっぱいになっていたということです。救い主を前にした彼らは、ずっと会うのを楽しみにしていた約束の王に会えることがわかった彼らは、もう抑えることのできないほどの最高の喜びに、満足に

満ちあふれていたのです。言うまでもなく、王の誕生を知っていても、いっさい関心を払おうとせず、その出来事確かめようとしなかった宗教家の態度とは全然違ったのです。博士たちは救い主を前にして、王を前にして、大きな喜びにあふれていました。

2) 「ひれ伏して拝んだ」 11 a 節

でもそれだけではありません。二つ目に注目してほしいのは、博士たちがへりくだってひれ伏していたということです。11節の前半を見ると、「そしてその家に入って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。」と書いていました。喜びにあふれていた博士が幼子となっていたイエス様を初めて目にした時にとった行動は、ただひれ伏すことでした。ただ礼拝することでした。ここで登場した「拝んだ」ということばには、「上の者や権威ある者にふさわしい敬意とか称賛を表わす」、「その者にひれ伏して仕える」といった意味も含まれています。つまり博士たちは、家に入って王を前にするなり、だれが上でだれが下なのかということをしるべきにへりくだって認めていたということです。救い主としてお生まれになった方、王としてお生まれになった方を目の前にしたその瞬間に、自分が下だということをしるべきに認めていたということです。もちろんだれかに言われたから、そうしたのでもありません。間違っても嫌々ながらそうしていたのでもありません。そうではなくて、みずからへりくだって、みずから膝をついて王として生まれた方を拝んだのです。

なぜだと思えます？自分たちの前にいるそのお方が、ずっと人々が待ち望んでいた約束の救い主なのだ、彼らはわかっていました。自分たちの前にいるそのお方が、ほかのだれでもない王の王として生まれた神の御子なのだ。そしてその偉大さを知っていた者のとった行動は、ただひれ伏すことだけでした。自然にそうしたのです。これも頑なに自分の地位を捨てようとしなかったヘロデの態度とは全く異なるものでした。王の誕生のことを聞かされて恐れを抱いて、その出来事を絶対に受け入れようとしなかった者とは違っていました。博士たちは王の誕生を喜び、そして喜んで自分からへりくだってひれ伏していたのです。

3) 犠牲を払って「贈り物としてささげた」 11 節

そして三つ目に注目してほしいのは、博士たちが“犠牲を払って捧げていた”ということです。11節の残りの部分に「そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。」と書いていました。大きな喜びにあふれ返っていて、へりくだって王として生まれた方にひれ伏した博士たちですけれども、彼らは確かにこの場においても犠牲を払ってささげようとしていました。でも、彼らはここにたどり着くまでもに数多くの犠牲を払い続けてきたのです。例えば、多くの聖書注解者たちは、この東方の博士たちと呼ばれる存在が、現在のイラクとなるバビロニアか、現在のイランとなるペルシャあたりから来たと考えています。例えば仮にバビロニアだとしても、エルサレムからそこまでおよそ1500キロの道のりでした。レジメの地図にはバビロンと書いていますけれども、このバビロンというのはバビロニアの首都です。かつてこのバビロンからエルサレムへと旅をした一人の人物がいました。その人物の名前はエズラです。彼は首都バビロンからエルサレムへと旅をした際に、どれぐらいかかったのかをエズラ7：9に記してくれていました。「すなわち、彼は第一の月の一日にバビロンを出発して、第五の月の一日にエルサレムに着いた。」とあります。計算してみると、少なくとも片道4カ月の月日を要していたのです。博士たちは、王として生まれたそのお方を拝むために、少なくともそれだけの日数をかけてやって来たということです。そしてやって来ただけではありません。彼らは同じ時間をかけて帰ったのです。ということは、彼らは少なくとも8カ月から1年、もしくはそれ以上旅をして、王に会うために時間を犠牲にしなくてはなりません。いや時間だけではありません。彼らは自分たちのからだをも犠牲にしなくてはなりません。飛行機や車に乗って快適に旅ができた時代ではありません。歩いたり、いろいろなことをしていたのです。そして彼らは彼らの国での自分たちの生活も犠牲にして旅に出

たのです。ですから、王として生まれた方に会うために、博士たちは少なくとも一年ぐらいの時間を犠牲にし、自分のからだを犠牲にし、生活を犠牲にし、すべてのことを犠牲にしていたということです。

そしてそのようにしてたどり着いたその場所で、それに加えて博士たちはここで黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげていました。これらはどれをとっても非常に高価なものでした。黄金というのは、当時の社会において最も貴重で価値のある、まさに王様にふさわしい金属でした。乳香というのは美しい香りのする高価な香料で、特別な時にしか使われることはありませんでした。没薬というものは乳香ほど高くはなかったとしても、当時価値のあるものとして扱われて、特に死者の埋葬などに用いられたものでした。ポイントは、こういった高価な贈り物を彼らはみずからささげていたということです。まだ小さな幼子には似つかわしくないと一瞬思えるような、そんな高価なものを彼らは喜んで贈ったのです。

いったいどうしてでしょう？それは彼らが王として生まれた方の偉大な価値を知っていたからでした。生まれた王の偉大さを知っていた博士たちにとって、どんな犠牲を払ったとしても払い過ぎることはありませんでした。すべてに勝る最高の救い主のためであれば、彼らは自分たちの時間やからだ、お金さえ、何もかもをささげたとしても、喜んでそこに行き、ひれ伏したのです。そんな“礼拝”こそ、王として生まれた方に対してふさわしい応答でした。そして、確実に言えるのは、そうやってひれ伏している博士たちの心には、喜びがあふれていたということです。

では最後に、改めて考えてみてください。果たして、この博士たちのような応答を私たちは今しているのでしょうか？王として生まれたと言われるそのお方、救い主イエス・キリストを知っている者として、私たちはその方をいつも喜び、その方の前にへりくだってひれ伏し、そして犠牲を払ったとしても、自分のすべてを捧げて仕えようとしているのでしょうか？それともまだこの方に対して恐れを抱いたり、自分の救い主や王として受け入れることに無関心を貫いているのでしょうか？もしを恐れを抱き続けているという方がいるのであれば知ってください。王として生まれた方がすべてを支配してくださっているということほど、私たちにとってすばらしいことはないということです。永遠の初めから存在して、すべてにおいていつも正しいその偉大なお方が、いつも私たち自身とともに歩みをしてくださると確信できることほど大きな喜びはありません。また、もし無関心を貫いている方がいるのだとしたら知ってください。きょう私たちが見てきたように、王として生まれた方のことをただの知識ではなくて、自分自身のこととして知っていることにこそ、本当の喜びや満足があります。この方こそ私たちにとって必要な存在だということです。十分な存在だということです。

ですからどうか、きょうこうして王として生まれた方をお祝いするクリスマスの日に、いつまでも頑なに王に逆らい続けているのであれば、それをやめてください。そのようにして逆らって生きるのではなくて、自分の罪を悔い改めてください。罪人を救うために来られた、救い主イエス・キリストを自分の救い主として、主として信じ受け入れてください。そして王として生まれた方を自分の王として喜んで、この方を礼拝する者として歩んでください。この方にこそ本当の喜びがあります。

また、今まさに主の偉大さを覚えておられる皆さん、すべてをささげて王に仕えておられる皆さん、ますますともにそのように生きていきましょう。博士たちが王として崇めていたイエス・キリストは、確かに永遠に変わることはないまことの神の御子でした。私たちの罪のために十字架にかかってくださり、救いのみわざを達成された救い主でした。ほかの何物も及ぶことのない、王の王として生まれた偉大なお方でした。クリスマスはこのすばらしい方の誕生をお祝いする時です。このすばらしい方が地上に来てくださったことをほめたたえる日です。この方が私たちのために来てくださったということを喜ぶその日です。でも同時に、私たちがささげる賛美はきょうで終わりではありません。私たちはいつも喜びにあふれて、私たちのために来てくださった救い主の、王の偉大さを覚えているからこそ、その方の前にへりくだってひれ伏し、あらゆる犠牲を払ったとしても、この偉大な王に仕え続けていくのです。ですか

ら、このクリスマス、ぜひ心を新たにして、また続けて、この主の栄光を現す者としてともに歩いていきましょう。